

アンビバレンスを保守する : アニー・プルー『オールド・エース』におけるトポフィリアの様相(1)

著者名(日)	米塚 真治
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	45
ページ	216-202
発行年	2013-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00005722/

アンビバレンスを保守する

— アニー・ブルー『オールド・エース』におけるトポフィリアの様相(1) —

米 塚 真 治

はじめに

白人が北米先住民から土地を奪う際、論拠としたのが「先住民は土地を有効利用していない、ゆえに所有権はない」ということだった。

だがおよそ人間の活動は、土地の側から見れば、土地をえぐっていつとき立つ土埃のようなものにすぎないのではないかと述べるのが、アニー・ブルー (1935-) の『オールド・エース』(2002) である。確かに、大平原で繰り返された人々のベンチャーの失敗の数々を見れば、そうであるように思われる。

このことは、アメリカ合衆国の信条と言うべきソーシャル・ダーウィニズムすなわち「新陳代謝による進化」という観念への、アンチテーゼと受け取ることができる。

ブルーがオルタナティブとして提示するのは、「過去」の「再利用」、または、過去すなわち「記憶」の「保存」というコンセプトである。そこでは、土地への収奪をやめるために「所有権」という観念の再検討が必要であり、そのために、「移動」と「非所有」とを基本とする先住民のライフスタイルを再利用できないか、とも提案される。

しかしこの提案は主要登場人物の一人によって、グローバル企業に対して地元の「定住」民の権利を主張する中でなされており、提案と、主張の立脚点とのあいだには、一見すると矛盾がある。そしてもとより、将来の「移動」を前提とすること自体が土地への収奪を生んでいる側面もあるので、「移動すれば収奪はなくなる」と一筋縄にはいかないのだが。

ブルーは収奪者にも、復古派にも、そして傍観（留保）者にも、黒白はつけない。しかし、そこそが文学の有効性であり、ブルーを、優れた文明批判者であった「曖昧なアメリカ作家」たちの系譜に位置づけるのではないだろうか。

ブルーの経歴：地域とグローバリゼーション、開拓と「ホーム」

アニー・ブルーは東部コネチカット州に生まれ、歴史学（ヨーロッパ経済史）の研究者からフリーランス・ライターを経て小説家になった。実用書のライターとしては「食」を中心にアウトドア、ネイチャー、ガーデニング、手芸関連の記事・パンフ・書籍をものし、歴史と地域性を反映した内容で評価を得ていた。私生活では二十代に三度の結婚・離婚を経験して四児をもうけ、うち三人の息子のシングルマザーとなった。ライター時代には女性の友人とともに、ソーロバりにログハウスを建て、自給自足や物々交換をして暮らしたという。

1980年代後半に小説家としての活動を本格化させるまで、ブルーは転居を繰り返してきたが、居住範囲はバーモント、ノースカロライナ、メイン、ロードアイランド、モントリオール、ニューハンプシャーなど北米東部に限られた。ピューリッツァー賞をとった『 SHIPPING・ニュース』をはじめ初期作品でも、ニューイングランドやカナダ東部が舞台となっている。地域の厳しい自然環境と向き合い、グローバル経済にも従属を強いられる、恵まれない人々の過酷で不条理な生活が描かれた（この頃の作品は主題的に、ノリスやドライサーの自然主義小説と比較されている）。

1990年代半ばから西部の「辺境」ワイオミング州に移住したあとは、南西部テキサス州および隣接オクラホマ州を作品の主な舞台にして長編を二作、『アコーディオンの罪』と『オールド・エース』を書いた。ヨーロッパからの移民や西部開拓を含め、アメリカ近現代史をたどり直すような内容となっている（前者を、「構え」の大きさや主人公の多さからドス・パソスの『U. S. A』と比較する評もある）。前後して、ワイオミング州を舞台にした短編集三冊を書き継いだ（最初の一冊のなかに、映画化された短編『ブローックバック・マウンテン』を含む）。

短編集執筆と並行して、ブルーはワイオミングの一地方を扱った大部の地誌の編集・執筆にも精力を傾けたほか、同州の自然保護区の一部に新たな自宅も建設した。その後、夏季はこの自宅、冬季はニューメキシコ州に居住しているという。2011年には、自宅建設の経緯に、移民であった先祖の伝記や自伝を織り交ぜた回想録 *Bird Cloud* を出版している。

以上から指摘できるのは第一に、地域性とグローバルなものに対する関心が初期から一貫していること。第二に、彼女の居住地と作品舞台の地理的変遷が、アメリカ開拓史のたどり直し、「一人開拓史」とでも言うべきものを紡いでいることだ。

後者の動機付けに関してブルー自身は、歴史学的な関心と自身の先祖への個人的関心とを回想録のなかで挙げているが、回想録の終わり近くには、ある矛盾した記述が見いだされる。

私がバード・クラウドで過ごした最初の、そして唯一、通年となる一年が、こうして終了した。三月にはまた戻り、その後も、早春にやって来て、道路を雪がふさぐまで滞在することを数年続けたのだが、次の事実と直面しないわけにはいかなかった。この場所を自分がいかに愛しているにせよ、ここは自分が夢見ていた最終の「ホーム」ではなかったのだし、将来もなり得ないのだという事実に。⁽¹⁾

もとよりブルーは地理に通じており、ここが雪に閉ざされる場所だとの記述は建設前から出てきているので、「自分が夢見ていた最終のホーム」という矛盾した希望には、心理的否認ないしアイロニーを読み取らざるを得ない。

否認やアイロニーは、アメリカ人の集団的幻想が内包するものでもあった。かつてジョン・スタインベック（本作の舞台オクラホマを『怒りの葡萄』の出発地とし、ブルーも地域主義作家として高く評価している）は最晩年のエッセイ『アメリカとアメリカ人』（1966）のなかで「ホームに対する国民的夢」に触れ、そこに抑圧された矛盾を指摘した。彼はそれが「アメリカ人がいくつか持っている、強くて消えることのない夢、国民を統合する幻想」で「アメリカ的生活様式」の一つであり、「ホームという言葉だけでアメリカ人のほとんど全員が涙を流すだろう」と述べたあと、その起源を「開拓者の子孫という幻想」と開拓時代の「シェルターの必要性」に見いだす。しかし、実体（開拓者のスキル）はとうに失われていることや、かつて「シェルター」で守られていた「美德」はカウボーイと保安官が先住民を暴力によって排除することで成り立っていたという矛盾も指摘する。彼は続けて、「自然」をイメージしながら自然とはふれあわない「郊外生活」志向の矛盾や、

「家と移動生活」の「二重の夢のシンボル」の実現でありながら、社会的地位や成功・失敗のしるしや、「新車」購入への商業的圧力を反映してしまう「モバイル・ホーム」の矛盾を指摘する⁽²⁾。

思えばブルーの『ブロックバック・マウンテン』も、生き残った方のカウボーイが暮らす貧しいモバイル・ホームの情景から始まり、そこで終わるのだった。本論考で扱うフィクション『オールド・エース』は、スタインベックのエッセイと同じく、アメリカ的幻想と大平原の歴史を扱う。そこで、「定住」の幻想と「移動」の現実とを持つ著者ブルーの「場所への愛」がいかに関心され、何を表すかは、注意深く観察する必要がある。

先行研究：地域主義をめぐって

『オールド・エース』を土地・場所との関わり方においてとらえる先行研究としては、若手の文学・文化研究者により 2009 年に出版された Alex Hunt 編『アニー・ブルーと地理的想像力——地域主義を再考する』⁽³⁾ のなかで、本作に言及している四つの論文がある。

ケンタッキーで環境文学を専攻する Berry はブルーの諸作を「コーポレート・アメリカ」に反対する言説ととらえ、本作では反コーポレート運動（タイトル・ロールの地元民エース・クラウチが率いる）への評価や主人公が参加するかどうか留保がつけられているものの、地域共同体にオリエンタリズムしたいくつかのミクロな実践（祭り、バイソン農場、二種類のカフェ、主人公がこれから開くだろう古書店）のなかに「希望ある結末」が見出せるとしている⁽⁴⁾。

ノルウェーの米国地方文学研究者 Voie は、本作の初出時にニューヨークタイムズ書評で評者 Laura Miller に「これならノンフィクションでいい」、つまり「小説」である必然性がないと言わしめた「ディテール過剰」の側面を、土地への帰属という観点から正当化する⁽⁵⁾。主人公のボブが「土地に所属する」にいたるまでの変容は、「直接の経験、本〔先人の旅行記〕、会話」を通じた「風景、歴史、物語への細部にわたる興味」によってもたらされるので、これらのディテールは不可欠だと主張するのだ。また Voie は、冒頭部においてボブが「道に迷って」いることと様々な事物が「メッシュ」状の配置を描いていることに着目し、本作のプロット全体を「疎外された空虚な主人公が、土地から作り上げられた自己を得て」自身が「メッシュ」の中に抱かれるまでの過程であると解釈する。また、本作には場所設定にふさわしく「ウェスタン」の要素があることを指摘し、「最後が近づくと銃が火を噴く」ことを例に挙げる。

ニューヨークのアメリカ文化研究者 Abele もウェスタンの要素を指摘するが、本作は「西部的な価値」すなわち「伝説の西部と家族の伝統への虚偽のノスタルジア」を回復せよと訴えるのではなく「西部の風景そのものの回復」を訴えているとして、同時代の西部小説とのあいだにある差異を指摘する⁽⁶⁾。また、ポレミカル（論争的）過ぎる、アジェンダの部分が多すぎるなどの批判があること、これまでにアプトン・シンクレア『ジャングル』やハリエット・ビーチャー・ストウ『アンクル・トムの小屋』との比較がなされていることを紹介したうえで、本作のポレミックのほうがり「おもしろく読める」と言い、主人公ボブが最終的にエースらの環境保護運動に同調しないとみられること（とその理由）に、本作の「おもしろさ」の核を見いだす。オープン・エンディングであってもそう推測できる理由は、Abele の考えでは、ブルーのヤッピーおよび「外来者の価値観の押しつけ」に対する嫌悪は明らかであること、エースとその仲間たちの行為や資金源（石油、地下水源）もまた土地の収奪やグローバリゼーションと不可分であること、などだ。

テキサスの南西部文学研究者で、論集の編者である Hunt が展開する議論は最も説得力あるものと言え、本作にみられる「共感と皮肉の混じり合い」、たとえばコミュニティの人々の頑強さに対

する賞賛と、地域ファシズムともいうべきステレオタイプの強調とが入り交じったアンビバレント（両面価値的）な描写は、建築家ケネス・フランプトンの言う「批評的地域主義」に道を開き、本作を地域本質主義やロマン主義の罟から解放するものだと評価する⁽⁷⁾。初出時の書評で批判された「ナラティブの断片化」（地域史，フォークロア，語りの伝統，環境・地域問題の頻繁な挿入によって）についても同様に，作品に「自己言及／内省的」な真正さを与え，等身大の主人公の経験を読者に追体験させるものとして肯定する。主人公ボブが「エースの語るビジョンに必ずしも納得したわけではないが，参加する」と決め，不動産部門を担当するオファーを受諾する点—— Hunt は Abele らと異なり，そう解釈する—— も，エース・クラウチのような「良心的な金持ち」ではない一般読者に「希望のナラティブ」への参加を可能にする鍵となる，と論じる。

Hunt は「ストーリーは環境に対してリアルな効果を持ちうる」と主張し，ナラティブ（による）エコロジーという概念を提唱している。かつて 1930 年代大平原のダストボウルは「土地に，誤ったストーリーを書き込んだ」ことから起こったのだし，現状を知るうえでも「見るだけでは真実を知るに十分でなく，ストーリーを知らねばならない」と言うのだ。プルーは本作でこの「ナラティブ・エコロジー」を，地域に深く根ざすキリスト教のナラティブ，特にエデンの園のナラティブを，ポストモダンのリサイクルし書き換えることによって実現している，と Hunt は言う。そして本作全体をエデンの発見（探検），喪失（開発），回復のビジョン（持続可能なエコロジー）へといたる過程として分析してゆく。

先行研究の評価：マーク・トウェイン的両義性

上記四つの論考の細部に関していくつか指摘すると，「ウェスタン」小説の側面について，「銃が火を噴く」のはボブの同僚イヴリンが重傷を負い，続いて所属企業の幹部が殺害されるくだりを指すだろう。ただし，その銃弾を放つのは地元住民の一人であり，主人公ではない。その意味ではむしろボブとエースとが無人の野で言論によって対決する場面こそが，「決闘」に相当すると言える（ただし作品の各所で言及される「秘めた暴力性」の伝統については，ウェスタンというより，むしろ後述する共同体主義と排除に関連して検討すべきだ）。

本作が土地という「メッシュ」への帰属過程を描くとする Voie の指摘は，前半に関しては当を得ているが，本作全体としては，他の「メッシュ」の存在や，それらと主人公との関わりも見なければならない。たとえば主人公の所属企業が提供する「グローバルな流通」のメッシュや，「最大多数」への幻想的な帰属というメッシュだ。地元民の「メッシュ」にしても，必ずしも一様というわけではない。

Voie や他の評者が指摘する「過剰なディテール」に関して言えば，動植物名や地形などの詳細な記述によって読者にリアリティを力づくで納得させる，ローカル・カラー（地方色）小説としての側面も指摘できる。そして，このローカル・カラーを始めとして，目にとまるのは，マーク・トウェイン的な要素だ。列挙すれば，語りのトール・テール性。特に，奇妙に饒舌な語り部であるコミュニティの人々の語りは，明確にオーラル・ヒストリーとトール・テールとの混合体をなしている。トウェインを想起させる最大の要素は，主人公を巡るものだ。孤児でアウトロー（本作では迷惑施設の用地買収スパイ）の主人公。彼の旅。偽悪主義。自分自身が教わって現に使用している言説（トウェインではキリスト教，本作ではグローバリズム・功利主義）への疑い。「外道」であるにもかかわらず人一倍いさく道徳的苦悩と，良心にもとづく決断。これら一連のアンビバレントな要素（Hunt が指摘する「自己言及／内省的」要素）は，Abele が指摘する「ボブのピカレスクな

ナラティヴ」以上に、トウェインの「悪ガキ」小説、特に『ハックルベリー・フィンの冒険』を強く想起させる（ただし、本作は多元視点の三人称で書かれており、ハックの一人称とは異なるが）。

ビルドゥングスロマン（成長物語、教養小説）としての側面も同書の流れに連なるが、ただし「アメリカン・ドリーム」神話（「地域の人々からの役割期待に根ざさない起業」とブルーは解釈しているようだ）への揶揄が随所にみられる点では、『おんぼろディック』的な意味での成長物語に対しては批判として機能している。

四つの論文に共通するのは、この作品の書法にアンビバレンス（両面価値・感情。また、どちらかに決めかねること）を見て取っていることだ。Berry は「反コーポレート」を軸に、Abele はエコロジーを軸に、Hunt は地域主義とポストモダニズムを軸にしながら、それぞれ環境保護運動の評価や主人公の選択、小説自体の自己言及性のなかに、アンビバレンスを見いだしている（Voie だけは、「迷い」から出発して地域への帰属に向けて、アンビバレンスが逡巡してゆく過程ととらえる点が異なる）。

私のアジェンダ：「場所愛」の立脚点

「意図的にアンビバレントな書法」という見解において、私は先行研究に同意する。そのうえで本論考のねらいは、先行研究の「場所」「コーポレートなもの」といった視座を継承しつつ、前者に心理分析を加え、後者に経済の知見や現代思想の文脈を加えることで、アンビバレンスが本作にどのような価値を生み出しているかを多面的、具体的に論じることだ。

中国系米国人の現象学的地理学者イーファー・トゥアンの古典的著作に、フランスの思想家ガストン・バシュラールの造語「場所愛」を題名に冠した『トポフィリア』（1974）がある。ボブが「場所に帰属する」までの前半は、トゥアンが同書で提起した「場所愛」の概念を参照すると、比較的わかりやすく説明できる。根無し草を自認する孤児で「場所愛」を持たない主人公（その一点において、うってつけの「グローバル人材」である）が、外来者ならではの視点で現地の問題点を把握したあと、個人的感情や記憶を重ね合わせることができる「場所」との出会いによって心理的なヒーリングを経験し、当地のコミュニティの一員となり貢献を志す、と。「個人的記憶と混じり合う景観」「来訪者の視点の特質」という同書の観点は本作の分析に有効だし、両親の失踪などの事情から低い自己評価を抱えたまま生きてきた主人公が癒やされるまでの経過を、より心的な過程に即して説明することができる。

ポレミックの性格が強まる後半に関していえば、「反コーポレート」とくくれば済むほど、話は単純ではない。場所愛と職務との齟齬に関して、主人公は場所を立地条件によって分類しながら、功利主義的かつ弁証法的解決を図るが、そのアイディアは会社の拒絶や地元の環境保護運動の介入によって半ば頓挫し、半ば盗用される。並行して、ボブは「物好き」な珍品（古書、ラバが引いたフレイトワゴン、プラスチックアート）の探索・蒐集に取りかかっており、それが最終的に彼なりの「選択」になると思われる。このとき彼が選択しているのは二つ、「現に目の前にいる人々」と、「過去の痕跡」——いいかえれば実在する人々の営み（人々が担った「重荷」、失われた「周縁」のあいだのネットワーク、かつて主産業であった産油など）が生み出した「タンジブル（触知可能）な過去の象徴」——であると言える。

主人公の「選択」にいたるまでの理路をたどるには、彼を頓挫させたりヒントを与えたりする他者の言説や、その論拠への目配りが不可欠だ。コミュニティの潜在的リーダー（元クー・クラックス・クラン幹部の子息）で復古的な環境保護・反コーポレート運動を率いるエース・クラウチは、

「対決」に訪れたボブを説得しようとする際、「正義」や「共同体への責任」（この「責任」は、対象が限定されない点で、むしろデリダ的な意味での「応答可能性」と訳すべきかもしれない）、「土着者の権利」を口にする。実際に、功利主義、コミュニティアニズムといった「正義・公正」論、「責任」論、「所有権」論の文脈で本作のポレミックにアプローチするのは有効だ。そうしてはじめて、功利主義が説く「幻想の最大多数」や復古的エコロジー運動が説く「幻想の過去」と、ボブとのあいだの立ち位置の違いが明瞭になる（そのボブも、もう一段と遠いものを「幻視」しているわけだが）。

第三に、判断保留ゆえに「良き聞き手」である主人公ボブを聞き役・観察者にして、コミュニティの現状に根ざしたさまざまな小さな実践が紹介されている。それらは「大問題」と正面切って向き合うとか、正鵠を得ているというのではないかもしれないが、作者が特に共感をこめて魅力的に描いている部分であるが見える。また、そこに反映している諸課題は、日本人の私たちにも見覚えのある「今日的」な課題である。

まとめると、この論考のアジェンダは三つある。第一に主人公ボブ・ダラーにおけるトポフィリア（場所愛）の過程と効能を、心理面で丁寧な跡づけること。第二に、土地の利用形態や、「場所」に関する異なった思想のありようを、経済史的観点、「正義・公正」論や「責任」論、「所有権」論の観点からなるべく正確に把握すること。そうすることで、家父長的リーダーから地域の「保守」を託されようとした青年が選び取った彼なりの「保守」のかたちとその価値を、できるだけ正確に紹介すること。第三に、「判断留保」や「第三項の保持」によって開かれたアリーナで行われるさまざまなミクロの実践を、なるべく多く書きとめ、本作のスコープの広がりと普遍性を示すこと。

ブルーの文学的名声は英語圏を超えるとはいえ、その作品を何かしら論じること自体に価値が見いだされるほど、メジャーな作家とは言えないかもしれない。だが、本論考と、後続する論考全体を通じて、文学／フィクションの力とその有効性——同時代の困難な課題と向き合う際にその問題を縮減せずに（困難さや愚行も含め）ありのままに、かつ長いスパンを持って提示できること——を、彼女の作品を通じて例示することを、ねらいにしたい。

冒頭部に見る：過去と現在、個人・企業・地域

本作前半のあらすじをごく簡単に述べれば、主人公で主要視点人物であるボブ・ダラーは国際的食肉企業の養豚施設用地買収のため、過疎地であるパンハンドル地域（テキサス州とオクラホマ州にまたがる）に潜入する。孤児であった彼は、周辺地域の過去の旅行記、なかでも工兵隊の軍人エーバートが書いた踏査記録の読書にふけるうちに、また、情報収集の名目で地域の人々の昔語りを聞くうちに、記録の著者および地域の過去のなかに、自分自身とアイデンティファイできる要素を次々と見出してゆく（前者は、年齢が同じこと。同期の人々への劣等感。後者は、両親をまねた探検への希求。また逆に、両親を反面教師とした継続性。自身も経験してきた逆境と軽視、など）。現在の地域共同体にも愛着を抱くようになる。求めてきた「人生の意味」をようやく掴みはじめる主人公だが、地域共同体への愛着は職務と齟齬をきたすことになり、その葛藤や解決への試みが、物語を先へ進めていくことになる。

書き出しは、ターゲット地域へ車で移動するボブの眼前の風景を語りつつ、ボブの心理・記憶の記述と、広義の地理の解説とが交互に現れる。「景観の理解は、人間的な出来事の記憶と混じり合う時、もっと個人的で、もっと長続きするものになるのだ」⁽⁸⁾ という『トポフィリア』の指摘を地でいくようだ。

デンバーからたどってきた道順を提示し、「地理」に注意を喚起したあと（「峠」「死火山地帯」「ピストルの銃身形の地方」。後者は「ウェスタン」な結末の予告でもある）、NPR からキリスト教系へのラジオ局の切り替わりで、新たに入った地域の特質を示唆する。そこで流れる「カントリー・ミュージック」の歌詞は、Voie が論じる「土地への所属」をテーマにしている。「歌の歌詞は家にいてくれとか家に帰りたいとか家が落ち着くとか家を出るのは間違いだとか、そんなのばかりだった」（1 章 15 頁）⁽⁹⁾。

風景にいくつか個人的記憶や感情が重ねられたあと（後続する論考で詳述）、「地平線の彼方の大草原」が見えたのに続いて、道路わきに展開する穀物生産・流通のための共同農業施設の記述が始まる。この一節は短い中に、科学的なタームによる観察が続けざまに現れる。

前方にぼんやりと都市の姿が浮かんだ。高層ビル、モスク、教会の尖塔——が、近づいてみるとカントリーエレベーターと給水塔と貯蔵所に姿を変えた。カントリーエレベーターが平原では一番高い建物で、両肩を左右対称に突き出した姿は運動エネルギーをぐぐっと貯め込んでいるように見えた。しばらくするとボブは、水平方向のリズムにも気づいた。カントリーエレベーターは線路沿いの町に、五マイルか十マイルおきにぴょこんぴょこん現れるのだ。多くはコンクリート製の円筒か、煉瓦かタイルでできていたが、引き込み線の奥には古い木製のエレベーターが、ペンキも剥げ落ちみすばらしい姿で立っていることも少なくなかった。屋根はアスベストで葺いてあるのもあれば、さび付いた金属板が風にあおられているのもあった。町の真ん中では直線の街路が九十度で交わっていた。（1 章 16 頁）

「左右対称」の形、「運動エネルギー」という比喻、施設（カントリーエレベーター）の設置間隔の概算と材質の推測。「直線の街路が九十度で交わっている」という観察。これらも「審美的な喜びが科学的な好奇心と結びつく時、はかなさを超越するのだ」⁽¹⁰⁾ という『トポフィリア』の記述を地で行っている。

上記パンハンドル地域は、グレート・プレーンズ（大平原）、なかでもその南部の「ハイ・プレーンズ」と呼ばれる地域に属する。日本から東部のニューヨークや中西部のシカゴなどに飛行機で向かうと、眼下に巨大な円形の畑が散在しているのが見える。センターピボットと呼ばれる自走旋回式の装置が地下水を散水し、小麦やトウモロコシなど穀物を育てている。そばではその穀物を飼料にして、フィードロットと呼ばれる牛の大規模肥育場や、大規模養豚が営まれている。そんな地域だ。記述はそのような「生産施設」の描写に移る。

揚水ジャッキがぎっこんぱったん首を振り、左右には自走旋回式散水機が一基ずつ（片方はいまだにクリスマスの電飾をまとっている）、さらに圧縮タンクがあり、パイプや計器の複雑な集合体があったが、あまりに広大な風景の中に不規則に配置されているので、なんだか巨人が金属製のアクセサリをいい加減にばらまいたようにも見えた。オレンジと黄色で描かれた標識の下には、パイプラインが埋まっている。この畑と牧草地の地下には、パイプとケーブルとボーリング穴とポンプと抽出装置が織りなす目に見えない世界があり、それらは地表のフェンスや道路と一体となって、巨大な三次元のグリッドを構成しているのだ。さらにそのグリッドは、飛行機雲や目に見えない衛星通信を通じて、空にも伸びている。気づくと、畑の外れには鮮やかな塗装を施した V 型八気筒のディーゼルエンジンがいくつもあり（多くは天然ガスで動くよう改造してある）、地下のオガララ帯水層から水を汲み上げている。（同、傍点引用者）

次に、そこから穀物の供給を受ける、食肉会社（ボブがその一つのために職務を遂行しようとしている）が建設した多くの養豚施設も描写される。これら穀物生産・畜産施設の描写に見出させる「グリッド」（Voie のいう「メッシュ」）としては、まず「空間」的（水平・垂直）つながりとして、地表における大規模穀物生産と大規模畜産（養豚および肉牛生産）との結合。地表と地下とのあいだには、地下水と地下油田・ガス田の地下パイプラインが「巨大な三次元のグリッド」をなしている。そして「飛行機雲」や「衛星通信」によって、同時代のグローバルなつながり（生産物の輸出、労働者の供給など）が示唆される。本作をさらに読み進めると、施設の密度ある描写の中には「時間」的なつながりも含意されていたことに気づかされる。石油は古代の植物の遺物であるし、乾燥地での農業を可能にした巨大なオガララ地下水源は、過去の氷河の産物である（ゆえに、いずれも有限である）。振り返ると原書の表紙にも、また扉の言葉にも、風車を取り上げられているが、風車はタイトル・ロールのエースの職業であり、風（ダストボウル、土埃）に立ち向かう地元開拓民の生き様を表象するとともに、もちろん地下水源をくみ上げるためのものだ。これらは作者の社会的・歴史的スコープの広さを例示している。

主人公ボブの歴史的スコープも広い。「地平線の彼方の大草原」が見えたとき「身体はやがて熱く」なり「いつの時代でも胸が躍る」（15 頁）と感じるのは、当人には理由がわかっていないが、「鉄道が西部開拓を加速させた」歴史の知識を持っているから、デンバーを去って新天地にやってきたボブ自身と過去の開拓者とのあいだ、さらにはデンバーから幼子を捨てさらに西へと去った両親たちとのあいだが架橋されるのだ。この歴史的スコープの広さが、やがてエース・クラウチらの復古的環境運動とボブの立場を分ける一因として重要になる。

「フードレジーム」から見えるもの：功利主義とボーダーランド

農業経済の視点から見ると、「グリッド」はさらに厚みを増す。同時代のグローバルなつながりの内容がより具体的に見えるほか、農業の歴史（「レジーム」）の層の重なりもここに描かれていることが理解できるからだ。

農業経済学者ヘンリー・バーンスタインが著した『食と農の政治経済学』によると、1870 年代から 1914 年にかけて、「第一次国際フードレジーム」が、まさにここアメリカ大平原で、初めて成立した。インフラ面では、工業生産力が生み出した用具の生産。貯蔵庫や水利施設など共同施設の設置。加工と出荷配送のシステム。金融面では、収穫・作付け前に先物取引によって資金を調達できること。これらによって世界で初めて、穀物、牧畜などいくつかのモノカルチャーが結合し輸出を行うアグリビジネスが成立する。その後 1970 年代までの「第二次国際フードレジーム」では、企業の規模拡大と並行して、機械化・化学化・バイオテクノロジー化が進む⁽¹¹⁾。先物取引による資金調達以外はすべて本作の中で、冒頭部の農業施設の描写を始めとして、紹介されているところだ。

1970 年代以降の新自由主義的グローバリゼーション（「第三次国際フードレジーム」を構成するかもしれない、とバーンスタインは述べる）の時期には、作物の集中栽培システムないし家畜の飼養システムの構築が行われる。前者では土を「肥料の媒体」、後者では家畜を「抗生物質と濃い飼料と成長ホルモンの媒体」としてとらえ、「集中的に、短時間に食品を生産する」システムが確立する。この観点は、ボブの所属する食肉企業の経営者と上司の言説に、典型的かつ戯画的に反映されている。豚は「トウモロコシや豆と同じ」く「収穫する」「豚肉装置」（29 章 337 頁）であり、「スピードこそ時代の流れ」（27 章 315 頁）だと。

こうした「工場」化によって「収穫量の予測可能性が高められ」た結果、アグリビジネスにはバ

（209）

イオテクノロジー、ファストフード・飲食業、スーパーマーケット、穀物企業、食肉企業といった出自の異なる企業が収益を期待して参入する。「工場」化で、もはや「農業は場所の束縛から解放された」という信憑が生まれた結果、EU とアメリカの企業が相互進出を果たし、それらがカナダ、メキシコ、中国、インドなど「南の国々」に進出先を広げる⁽¹²⁾。本作に登場する養豚施設は、こうしてコングロマリット化・多国籍化した企業の「工場」にほかならない（ボブは「工場」的側面を、初めユーモラスに「変てこなグランドピアノ」（17 頁）にたとえ、意識下へと抑圧するのだが）。

コングロマリットや多国籍企業と国民国家とが、共謀・対立・補完いずれの関係にあるかは、つねに慎重な考察を要する。が、少なくとも第二次のレジームでは、メジャーなアグリビジネスが米国内連邦政府内に強い影響力を持つことで、米政府が国家主導の重商主義を遂行し、ラテンアメリカ諸国で搾取と暴力的支配（反米政権・勢力の転覆と多くの犠牲）を続ける主な要因となったことがよく知られている。第三次レジームでは国家主導の「暴力的」な色彩は薄まるものの、多国籍企業がグローバルな市場を前提として、ラテンアメリカ諸国にコーヒーなど輸出向け製品の生産を行わせ、いっぽうで主食などの国内市場向け製品は輸入させることとし、国内生産を事実上壊滅させた。近年、欧米国内での農業補助金やエコロジー政策、通貨政策とあいまって、ラテンアメリカでトウモロコシ飢饉が起こった一件は、記憶に新しいところだ。

多国籍企業はグローバル市場とともに、生産地としてボーダーランド⁽¹³⁾を必要としている。この点は米国内のボーダーランドを描いた本作でも、プルーによって検討されている。「農業は場所の束縛から解放された」というが、実際のところ工業的な栽培・飼育はしばしば環境コストの上昇と持続可能性への疑問をもたらしており、その立地は公害や資源の枯渇を許容できる場所に限られる。地元民を悩ます養豚施設の悪臭についてボブの上司は、「僻地で人口の少ない『田舎』」なのだし、「大多数の人には影響ない」（29 章 337 頁）と言う。本社幹部は「多数の幸福に奉仕するものこそが栄える」、ハイウェイの土地収用と同じく「人々は小さな共同体の利益より、大きな共同体の利益を優先する」（同 338 頁）ため立地は正当化される、とボブの懸念を一蹴する。このような功利主義にもとづいて、正当化が行われているのだ。

放棄と公害をめぐる：開拓者の論理と多国籍企業

環境コスト以前にも、グローバル企業は人件費などの有利性が消失すれば場所を捨てて移動するものであって、持続可能性の検討など、はなから無視している側面もある（作家・ビジネス論の平川克美は自身のブログ上で、このような余所者によるベンチャーの反復を「ボーダーレスな焼き畑農業」と名付けている）。本作で養豚施設のもたらす「公害」が紹介されるのはもう少し先だが、その前段で、この地域の過去における「開拓、利用、捨てる」というサイクルが描写されているのは、プルーが公害とこの放棄にいたるサイクルとの間に関係を認めていることを表すだろう——もちろん「捨てられた」農地が転用された「結果」として養豚施設が入り込むわけだが、それ以前に、発想の共通性の問題として。

引用で示せば、まず、この地域がトレール沿いの、「開拓」者の通過地であった段階の描写がある。

ここを続々と通過する旅行者たちに、草原は千通りもの横顔を見せ、そして相矛盾する記録を書かせた。春、砂まじりの風に草は横っ面を張られ、草原はトキワズナやアネモネやエゾノチチコグサやパンジーに彩られ、野鳥やレイヨウが息づいた。夏至の頃、牧草の食べ尽くされ

た野道（トレール）沿いを離れ、奥に分け入った者たちは、股ぐらまである草原が風に波打つ
のを見た。夏の終わりに野道を行く者たちは、乾ききった無用の砂漠に、刺されれば馬も動け
なくなるサボテンが点在する風景を見た。冬、平原に足を踏み入れるのは工作中的のカウボーイ
くらいだったが、肌を突く北風が雪とともに吹き抜けていった。（1章 17 頁）

次に、「利用」への言及（実際にこの地で行われた、放牧や定住農耕を組み込んだ土地利用形態の
記述は、もう少し先の箇所になるが）。

これから足を踏み入れようとしている、この計り知れないほど複雑な自然。それもある人々に
言わせれば、すでに回復不能なほど濫用され損なわれているというのだが、ボブ・ダラーには
さっぱり理解できなかった。ボブの目に映ったのは誰もが^{●●●●●●●●●●}見ているのと同じ——つまりこの巨
大なスケール感、首をぎっこんぱったんする揚水ジャッキの翼手竜、長大なセミトレラーが
路上に脱ぎ捨てるヘビの皮。（中略）ボブはバックミラーに^{●●●●●●●●●●}呟いた、「なんてぺっちゃんこな土
地だ」だが、その土地は人間が利用することをはばむような土地には見えなかった。（同、傍
点引用者）

生物にたとえた比喩は特異な比喩であり、「誰もが^{●●●●●●●●●●}見ているのと同じ」というボブの語りには違和
感がある。「同じ」だとすれば、17 頁でいかにも不気味な養豚施設を「グランドピアノ」にたとえ
たのと「同じ」比喩の仕方であって、「利用」「濫用」している現実の否認を示していると見られる⁽¹⁴⁾。
続けて、「ハンドルを握るサターンの脇に^{●●●●●●●●●●}いかにもものっぺりと広がる土地は、農作物に石油にガス
に牧畜に町の施設に、一インチも余さず利用されている」（同 18 頁、傍点引用者）とも記してある。
次に、「捨てる」ことへの言及。

時おり、見^{●●●●●●●●●●}捨てられた地所を通り過ぎることがあった。家屋は日光と風雨にさらされて色あせ、
枝の折れたハコヤナギの木が回りを取り囲んでいた。折れ曲がった風車や崩れた離れ家には、
この地方の^{●●●●●●●●●●}砕け散った歴史が散在しているようで、まるで製図工が昼食に立った後、机の上に
残された何本かの鉛筆のようだ。この土地の先祖たちは自分たちの生きた生涯のかけらや断片
の上空に、ふわふわと浮遊しているのだ。（同、傍点引用者）

「製図工」「砕け散った」という表現は、継承者の不在に加え、ベンチャーの企図そのものの挫折を
暗示している。「フロンティア・ラインの消滅」と言われたが、実際には開拓者がそのまま住んで
いるところは少なく、しばしば捨てられ、転用されて現在の形になっている。西部辺境はかつて開
拓民の進出先だったが、現在は「捨てられた場所」でもあるわけで、アメリカが「捨ててきた」と
ころに戻ることでアメリカの現在を再考しようとする企てに、この作品はなっている。

そして、「捨ててきたところ」の現状は「（ゴミを）捨てるところ」でもある。ボブはかつてキャ
トルタウン（牛追いと鉄道との合流点）として栄え、現在は牛の肥育場によって復興した町カウボー
イ・ローズに足を踏み入れる少し前に初めて、畜産施設のもたらす公害を知る。

巨大な肥育場にさしかかると、喉を締めつけられるような悪臭がして、風に巻き上げられた糞
で牛たちの姿が霞んで見え、雲の正体がなんだか分かった。テキサス・パンハンドルの悪名高
き茶色の季節、後で知ったあだ名は「オクラホマの雨」というのだが、そいつとの最初の出会

이었다。皮なめし工場と精肉工場では、おんぼろトラックの窓にチカーノの男たちの顔が見えた。大きな金属の看板が、まるで呼吸しているようにぱたぱたはためき、「洗牛場」と読めた。空は灰色にくすみ、線路沿いの枯れ草も同じ色をしていた。何年も前に化学薬品が撒かれ、地中の微生物はすべて死に絶えたと見える。(5章 61 頁)

ボブは「豚は、建物の中に」おり「清潔」(同)だと信じるが、養豚施設も、水資源を大量消費する点で、持続可能性に問題を抱えている(悪臭に関しても肉牛肥育場と同様であることが、いずれ知れる)。限られた資源の大量消費は、パンハンドル地域の非伝統的農業に共通する問題だ。

平原のいたる所で V 型八気筒エンジンのポンプが水をくみ上げ、油井が石油をくみ上げ、そして牧場では風車で水を汲み上げて貯水槽に溜めていた。貯水槽の周囲には泥の円ができ、そこから細い家畜道が十いくつも放射状に伸びていた。(同)

養豚施設の様子(「巨大な換気扇」「廃水浄化池」16-17 頁)と、放棄された個人農場の様子を読み合わせると、現地で何が起きているかは、この段階で早くに予測できる。地域に残った大規模農場を、少数の経営者(高齢化した)が機械とチカーノおよびベトナム人労働者に頼って企業的に経営しているが、水源の枯渇や後継者難などの事情から、かなりの土地は転売・転用され、これら「迷惑産業」の進出を招いたこと。「道路からは引っ込んで建ち、金網の塀に囲まれている」「監視装置付き」(同)という記述と公害の記述とを読み合わせると、家畜の排泄物による大気・水質汚染が住民の敵意を呼んでいることが想像できる⁽¹⁵⁾。しかし、土着の住民が少数であったり(もとより大平原では、農場は「散在」している)、都市部に移住した不在地主が多かったりすれば、反対運動は組織しにくいだろうとも想像でき、実際、作中でそのように展開してゆく⁽¹⁶⁾。

スタインバックは前掲『アメリカとアメリカ人』で、アメリカにおける公害の原因を、「一時的保有」を前提とするゆえの「無責任」に見出し、その起源を開拓時代へとさかのぼっている。

概して初期の入植者たちは、まるでこの国を憎んでいるように、まるでこの国を一時的にしか保有せず、いつなんどき追い出されるかもしれない土地であるかのように略奪したのである。こういう無責任な傾向は、現在でも大多数の人びとに根強く残っている。(中略)われわれの多くはいまなお祖先と同じように行動をし、目の利益のために未来を台無しにしているのである。川を汚す人、空気を汚す人は犯罪者ではなく、悪い人間でもないで、これは、大気と水はだれの所有物でもなく無際限にあると思いこんでいた初期の人びとの考えを受けついでにすぎないと推論せざるをえない。⁽¹⁷⁾

スタインバックが指摘した線で、公害の理由を「放棄を前提とした開拓」という「アメリカ的精神」の矛盾へと掘り下げてゆけば、同様に、継承者の不在による荒廃、モラルハザードの背景には、都市への集中に加え、スタートアップ(起業)を重んじる風土が考えられる。水源の面では適地とは言えない環境で、サステイナブルでない経営が横行する背景にも、「開拓」の名で短期的ベンチャーを許容してきた風土が考えられる。

「日系多国籍企業」の意味：キメラ性、外来者

「土地を長く使うには大切にしなければならないことを知っていても、無視した。一片の土地から作物を収穫すると、次に移り、侵略者のように国をおかした」⁽¹⁸⁾ という「幻想」や「前提」は、現代の移動性の多国籍企業が地球規模で展開する「焼き畑農業」にも該当するように思える。

実際、これらは異郷である現代日本の「辺境」でも馴染みの事態だ。「迷惑産業」に関して言えば、辺境・過疎・迷惑産業の「三点セット」は日本でも共通であり、福島原発事故を契機に問い直されているところだ（ただし日本の核関連施設の地元や、北米で核関連施設（採掘・核実験・廃棄物）を引き受けている先住民居留地と、このパンハンドル地域との違いのひとつは、補助金はおろか、雇用も含めた見返りがほとんど受けられないことだ。これは国や国策企業による事業と、多国籍企業による事業との違いにほかならない）。

農業に関しては、安易に「他山の石」めいた比較をすることは適切ではない（環境が異なり、モンスーンアジアの気候では、ここで警戒されているような集約型経営や環境への絶え間ない働きかけが、むしろデフォルトと考えられているからだ）。ただ、企業による農業経営は、すでに2003年の小泉政権当時に「構造改革特区」で導入されたものだが、TPPをきっかけに再び議論されている。食糧・穀物飼料の貿易を通じた米国との関連も、同様に再び注目を集めている（過去にあった不作・供給制限、供給の途絶と、価格の暴騰リスク）。作中で言う「世界を食わすテキサス農業」が現地においてサステナブルであるか否かは、ほかならぬ最大の輸出先である日本にとっても死活問題なのだ。

テキサスでは、日本資本の進出も行われている。本作でボブが勤務する企業のモデルは、ニッポンハムの現地法人としてパンハンドル地域に実在する養豚企業、テキサス・ファームとされる。作中の企業はシカゴと東京に本部を置き、実質的な本社機能と統括の社長は東京に、デンバーには現地事務所を持つとされている。社長は日本人のようだが、クォンタム・ゴライアス、すなわち「大量巨人」と命名されている。この多国籍企業に関してブルーが最も巧みに設定した点は、主製品をポーク・ラインド（豚皮スナック）、社名を「グローバル・ポークラインド」としたところだ。豚皮スナックは、アメリカ南部の農場労働者の嗜好品として紹介されることが多いが、起源は米国ではなく、南米・欧州・アジア各国にも同様なものが存在する。ただ、日本のものでないことだけは確かだ⁽¹⁹⁾。

フランスの社会学者フレデリック・マルテルの分析によると、メディア関連の多国籍企業では、米国企業が外国資本に買収されても、米国の現地本社がアイデンティティと経営権を失わないことはむしろ通常だ。ドイツ資本傘下のランダムハウス出版しかり、仏ヴィヴェンディ傘下や日本のソニー傘下の映画会社・音楽会社しかり。それらは、「最も数字が出せる」コンテンツとして、アメリカ大衆と若年層のカルチャーを「メインストリーム」として保持し、世界中に輸出している⁽²⁰⁾。ブルーが所属する出版の名門スクリブナーは、サイモン&シュスターの一インプリント（部門）としてCBSのメディア・コングロマリットに属し、たまたまアメリカ資本であり続けているが、彼女が業界のこうした事情を知悉しているのは自然だろう。「豚皮スナックを国際的に売る日本資本」という一見奇怪な設定は、時によって「米国大衆の象徴」としても「外来者」としても立ち現れる多国籍企業の「キメラ性」を、絶妙に表した設定といえる。

「外来者」としての日本人は、ブルー作品ではワイオミング短編集の第一集 *Close Range* におさめられた短編“A Lonely Coast”でも触れられる。日系人経営者への反感や差別（強制収容所に

いた過去も含め）や、「州の石油精製業の大半を支配し、大気を汚染する」日本企業が扱われている。しかし、視点人物である白人女性の孤独感が人種的偏見として表象されたと受け取れる描き方であり、基本的には特に「日本だから」ということではなく、「共同体主義と外来者への差別」という文脈で検討すべきだ⁽²¹⁾。

外来者である主人公：アンビバレンスの観察者

ボブも「外来者」である。イーファー・トゥアンは前掲『トポフィリア』で、外来者（翻訳では「来訪者」）は「居住者にはもはや見えなくなった、環境の長所と短所を知覚できることが多い」⁽²²⁾とし、「順応」してしまった居住者が問題を抑圧する例として、過去の英国の公害について、次のような指摘さえしている。

煙と汚れが、イングランド北部の工業都市をひどく汚染していた。これを、来訪者は容易に見ることができたが、地域住民は好ましくない現実を心の外に押しのけ、自分達がうまく制御できないことがらに対して見て見ぬふりをする傾向があった。イングランド北部では、心地よい室内コンサートのための施設や、ブラインドの陰での午後のお茶を発達させることが、工業汚染に対する住民の適応反応だったのである。⁽²³⁾

「適応反応」の例として『オールド・エース』では、すでに冒頭部分の景観描写の中に、アカオノスリという鳥の生態が描かれている。自身で狩りをする代わりに、人間の自動車が起こす動物との衝突事故を「利用」するようになった「電信柱の上の神様」だ。（Abeleはこのアカオノスリや、3章の「進化して無音化したガラガラヘビ」を「人間の支配に抵抗する動物」の例として挙げているが、私は「環境変化に適応する地元住民の象徴」としての側面を指摘したい）。対して外来者のボブは、はじめは職務上、認識を抑圧するものの、エースからの指摘もあり、やがて公害を正確に認識できるようになる。

旅行記の読書を通じて、先住民という「別の住民」との交渉を知っていることも、「自分たちの過去」に依拠する地元民とボブとを分ける点だ。外来者が記す旅行記についても、トゥアンは一節をさいている。外来者は既存の価値観によって見てしまうマイナス面もあるが、他方で、はじめから認識枠を超える景観（それはすなわち「簡単には耕作できない」土地ということになる）には、人類に普遍的な象徴性（「永遠に固定した役割」）が付与され、相反する感情が喚起されるとトゥアンは言う。

手に負えない自然の側面に対して、人間は感情的に反応する傾向があるのだ。あるときは崇高な神の住まいとして、またあるときは醜く厭な悪魔の住まいとして、それらを扱うのである。（中略）ニューメキシコの景観は、既に述べたように、かつては「むかつくような」、「吐き気を催す」、「単調」なものであると判断された。現在その州は、自ら「魅惑の土地」とであると主張し、しっかりとした観光産業を誇っているのである⁽²⁴⁾。（傍点引用者）

「探検家の日記には、自然の美に対するこのような突然の啓示がたくさん見られる」⁽²⁵⁾ともトゥアンは述べるが、彼がとりあげるニューメキシコとその隣接地域こそが本作の舞台で、その「単調」かつ「魅惑」的な、荒涼たる「自然の美」中での「啓示」の体験が、ボブと過去の旅行記作者をつな

ぎ、後述するボブの心理的なヒーリングの過程を進めることになる。いずれにしても、外来者の体験は両面価値的な側面を持つ。「ヨーロッパの都市の中世的な部分」を訪れる旅行者についてもトゥアンは同様な指摘を行い、彼らが魅了される美しさは「居住者には見えなくなった長所」に触れている反面、居住者がどう暮らしていたか（たとえば住みにくさ・不便さといった「短所」も含まれる）を理解しない「表面的」な見解でもあると指摘する⁽²⁶⁾。

だが、さらにアンビバレントなのは地元民の認識だ。トゥアンによれば、

住民は、自分たちの環境全体に浸っているがために、おのずと複雑な態度を取るのだ。来訪者の視点は単純であり、簡単に述べられる。また、目新しさに直面して、自分自身を表現しようとする誘惑にかられることもあるかもしれない。他方、住民にとっては、自分の複雑な態度を表現するのは困難であり、それは、行動や地域の伝統や伝承や神話を通して、間接的に表現されるのだ⁽²⁷⁾。（傍点引用者）

この観点から、本作の最後が「祭り」で終わっていることは重要だ。しかもそれは「有刺鉄線祭り」だ。この陽気な祝祭は一義的には、第一次世界大戦中の有刺鉄線の特需によって、鋼線工場が立地したこの町に巨大な収益がもたらされたことを記念して行われている（9章）ののだが、他方で有刺鉄線は欧州の戦場で多くの戦死に関わったはずであり、また地域の歴史をさかのぼれば、畑を牛から守り定住農耕を可能にした反面、自由放牧に打撃を与え「フェンス・カッティング戦争」の原因となり（家主ラヴォンの祖父のフェンス職人がリンチされた原因としても示唆されている）、さらにさかのぼれば、バイソンの移動を不可能にして先住民のライフスタイルに致命傷を与えたわけで、きわめて両面価値的（かつグローバル）な存在だ。著者が、「実在しない」（巻末「著者付記」）と語るこの祭りを結末に持ってきたうえで、外来者である主人公の視点から観察させていることは、文学／フィクションの本義としてアンビバレンスを保持し、表現しようとする著者の意図を、端的にあらわしている。

《注》

- (1) Annie Proulx, *Bird Cloud: A Memoir*. New York: Scribner, 2011, p. 231.
- (2) ジョン・スタインベック『アメリカとアメリカ人』大前正臣訳、平凡社ライブラリー、2002年、第2章。John Steinbeck, *America and Americans*. New York: Viking Press, 1966.
- (3) Alex Hunt ed., *The Geographical Imagination of Annie Proulx: Rethinking Regionalism*. Lanham, Maryland: Lexington Books, 2009.
- (4) Wes Berry, "Capitalism vs. Localism: Economics of Scale in Annie Proulx's *Postcards* and *That Old Ace in the Hole*," *ibid.*, pp. 169-81.
- (5) Christian Hummelsund Voie, "Drinking the Elixir of Ownership: Pilgrims and Improvers in the Landscapes of Annie Proulx's *That Old Ace in the Hole* and *The Shipping News*," *ibid.*, pp. 39-50.
- (6) Elizabeth Abele, "Westward Proulx: The Resistant Landscapes of *Close Range: Wyoming Stories* and *That Old Ace in the Hole*," *ibid.*, pp. 113-25.
- (7) Alex Hunt, "The Ecology of Narrative: Annie Proulx's *That Old Ace in the Hole* as Critical Regionalist Fiction," *ibid.*, pp. 183-95.
- (8) イーファー・トゥアン『トポフィリア 人間と環境』小野有五・阿部一訳、ちくま学芸文庫、2008年、第8章、184頁。Yi-Fu Tuan, *Topophilia*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1974.
- (9) アニー・ブルー『オールド・エース』米塚真治訳、集英社、2004年 Annie Proulx, *That Old Ace in the Hole*. New York: Scribner, 2002. 以下、頁は翻訳による。
- (10) 前掲『トポフィリア』第8章、184頁。

- (11) ヘンリー・バーンスタイン『食と農の政治経済学 国際フードレジームと階級のダイナミクス』渡辺雅男監訳、桜井書店、2012年、第4章。Henry Bernstein, *Class Dynamics of Agrarian Change*. Halifax NS: Fernwood, 2010.
- (12) 同書、第5章。
- (13) 米国内の「辺境」については「フロンティア」に代わって「ボーダーランド」という術語が、1970年代以降の修正主義歴史研究者や、南西部チカーノ作家グロリア・アンサルドゥアらによって用いられている。ボーダーランドは「先住民との接触領域」を含意しているが、ここでは「異なった経済状況や労働エートスを持つ地元住民との接触」という観点で少し意味を拡張して、国内・国外に当てはめたい。たんなる「周縁」以上の視野が提供できると思うからだ。水野由美子「先住民・フロンティア・ボーダーランド」(紀平英作・油井大三郎編『グローバリゼーションと帝国』ミネルヴァ書房、2006年所収)を参照。
- (14) さらにには事物を人間・動物の活動の産物として、「恒久的でなく一時的なもの」「いずれ滅びるもの」して描く狙いもあるかもしれない。
- (15) 作中でボブの家主・郷土史家のラヴォン・フロンクが「共産主義者だよ」と言及している歌手ウディ・ガスリーの歌に、かつてダストボウル時代にこの地域から脱出した人々を歌った“This Land Is Your Land”(1956)がある。発禁になった歌詞の一部で、ガスリーは大企業による土地収用に触れているが、そこにある「高い壁」という表現が、養豚施設の「金網の塀」を連想させる(「高い壁」ふりはこの後、ボブが実地調査のため潜入を試みるくだりで詳しく描かれる)。ボブの育ての親タムの同性のパートナーであった男性が“This Land Is Not Your Land”という題のエッセイを長期間書き続けていたことからしても、この言及が偶然とはとうてい思えない。そのエッセイの内容は具体的には記されないが、男性が「本格的な骨董」をめざしてタムと別れたことや、ロバート・フロストの有名な詩“The Gift Outright”, 本作後段のポレミックなど考え合わせると、「この土地は白人のものではない(先住民のもの)」と論じたエッセイのように思われる。
- (16) 農地所有者の変転や、遠隔地での不在地主化、それらに伴う経営の混乱は、ブルーが他の短編でもしばしば物語の背景として取り上げるところだ。
- (17) 前掲『アメリカとアメリカ人』第7章、147-48頁。
- (18) 同、151-52頁。
- (19) トマス・ピンチョン作品におけるカズー笛(実態はアメリカで発明されたおもちゃ楽器だが、ヨーロッパの巨匠たちが古くから協奏曲など楽曲を提供してきたと虚構の設定がなされている)の類似物であるといえば、ピンチョンの読者には通りがいいだろう。
- (20) フレデリック・マルテル『メインストリーム——文化とメディアの世界戦争』林はる芽訳、岩波書店、2012年。Frédéric Martel, *Mainstream*. Paris: Flammarion, 2010.
- (21) 『ブローックバック・マウンテン』で読者に衝撃を与えた、地域共同体の同性愛差別は、本作でも取り上げられる。
- (22) 前掲『トポフィリア』第6章、131-32頁。
- (23) 同。
- (24) 同、140頁。
- (25) 同、182頁。
- (26) 同第6章、131頁。
- (27) 同、127頁。